子宮頸がん予防ゼロプロジェクト

子宮頸がん征圧をめざす
専門家会議

# 第4回子宮頸がん予防活動奨励賞

# 受賞団体の活動ポイント

2015年4月8日

子宮頸がん征圧をめざす専門家会議

**子宮頸がんから女性をまもる会**

熊谷市「うちわ祭り」での啓発や学校での講演など能動的活動を展開 3

**志田 淳子**

高校の保健体育授業向け「子宮頸がん予防教育プログラム」を開発 7

**八田 賢明**

新成人をターゲットに子宮頸がん検診促進のチラシを作成 12

# 子宮頸がんから女性をまもる会
# 熊谷市「うちわ祭り」での啓発や学校での講演など能動的活動を展開

【プロフィール】

■「子宮頸がんから女性をまもる会」は、婦人科医である清水謙医師を中心に2009年に発足。活動メンバーは、おもに、助産師、看護師、薬剤師、細胞検査士、病院事務職員、看護学生、一般女性などがボランティアとして参加している。

■主たる活動として、熊谷市で毎年7月に行なわれる「うちわ祭り」での街頭啓発活動と、学校での講演によるターゲットを絞った啓発活動を行う。

「子宮頸がんから女性をまもる会」は、婦人科医である清水謙医師を中心に2009年に発足。本当に伝えたい対象者にきちんと伝えるためには能動的啓発活動が必要と考え、熊谷市で毎年7月に行なわれる「うちわ祭り」での街頭啓発活動と、学校での講演によるターゲットを絞った啓発活動を行っている。

毎年7月20・21・22日に開催されるうちわ祭りは、3日間で70万人程度の人出があり、さらに学校が夏休みに入っているため、昼夜を通して多くの若い女性に対してメッセージを伝達するチャンスがある。

また、中学校・高等学校・看護専門学校・看護系の大学などで、子宮頸がんと検診、HPVワクチンについての講演を行ない、若い女性、時には若い男性にも子宮頸がんに関する知識を持ってもらうようにしている。中学校と一部の高等学校では父兄にも同席して聴いてもらう体制をとっている。

今後、有志の助産師などを募り、様々なサークルや学校などでの会合で啓発のためのお話をしてもらえるような体制づくりを目指している。

## 1. 活動概要

子宮頸がん検診やHPVワクチンの普及に対する啓発活動のひとつとして市民公開講座があるが、実際には本当に伝えたいと考える対象者はこのような講座には参加していないのが現状である。

そこで聴きに来てくれるのを待つ受動的啓発から、こちらから伝達に出向いて行う能動的啓発活動が必要と考えた。

婦人科医である清水を中心に藤間病院の細胞検査士大塚、薬剤師鈴木、事務職佐藤らが主要メンバーとなり「子宮頸がんから女性をまもる会」として2009年に発足した。活動メンバーはおもに助産師、看護師、薬剤師、細胞検査士、病院事務職員、看護学生、一般女性などがボランティアとして参加している。特に熊谷市医師会准看護学校の生徒と埼玉県細胞検査士会の有志には毎年参加してもらっている。活動メンバーには事前に当会が開催する子宮頸がんやがん検診、HPVワクチンについての研修会に参加して理解を深めてもらうことにしている。

主たる活動として、熊谷市で毎年7月に行なわれる「うちわ祭り」での街頭啓発活動と、学校での講演によるターゲットを絞った啓発活動の2点が挙げられる。

## 2. うちわ祭りでの啓発活動

毎年7月20・21・22日に開催されるうちわ祭りは、3日間で70万人程度の人出があり、さらに学校が夏休みに入っているため、昼夜を通して多くの若い女性に対してメッセージを伝達するチャンスがある。

うちわ祭りで特に歩行者天国の時間が多く設定されている21・22日に、メッセージ付きのうちわ+資料を配布している。各ボランティアには、都合の良い時間帯に熊谷市観光課より提供されたエリアに設営されたブースに集まってもらい、うちわと資料のセットをバスケットに入れて歩行者天国に出向き、主に若い女性や小さな女児を連れた父母・祖父母などを中心に配布している。

前もって研修を受けてもらっているので簡単な質問には答えられるようにしてあるが、さらに詳細を知りたいというリクエストがあればブースまで来ていただいて対応している。もともとうちわを配布することが発端で発展したお祭りであるので、メッセージうちわはほとんどの人に受け取ってもらえるというメリットがある。

ここ数年はボランティアとして参加してもらっていたサバイバーの二人がメンバーを引き連れてフラダンスを披露してくれている。メンバーは大人3名以外は小学生や中学生、高校生などであるが、多くの集客力がある。ダンスの後で大人の3名のメンバーがメッセージを発信してうちわを配布してくれている。

うちわ祭りでは毎年5,000～10,000枚のメッセージ付きうちわや子宮頸がん予防の資料を配布している。配布時にがん検診やワクチンについての質問を受けることも少なからずあり、その時に詳細に説明して理解してもらっていると思う。特に女児を持つ母親からはいろいろな質問が出るので、将来の子宮頸がん予防に幾らかでも貢献していると考えている。

## 3. 学校教育での啓発活動

中学校・高等学校・看護専門学校・看護系の大学などで、子宮頸がんと検診、HPVワクチンについての講演を行ない、若い女性、時には若い男性にも子宮頸がんに関する知識を持ってもらうようにしている。この中で中学校と一部の高等学校では父兄にも同席して聴いてもらう体制をとっている。

学校での啓発活動に関しては、中学校7回、高等学校4回、看護系大学・専門学校5回等を実施した。学校教育での活動では後から感想文やアンケートの結果が得られるため、どのように理解してもらえたかが把握できる。高校生や大学生の女性からは20歳になったら頸がん検診を受けようと思うという言葉が多くきかれる。子宮頸がんという病気が自分たちの年代とあまりかけ離れていない年代で起こることを理解していただけているからだと考えている。現在20歳代の検診受診率が低迷しているので、このような活動から多くの20歳代の女性が受診してくれるようになるとうれしいことである。

中学生はおぼろげにしか理解できていないようにも見受けられるが、それでも関係のないと思っていた子宮頸がんという病気に少しでも興味を持ってくれるきっかけとなることを期待している。ワクチンに関しても報道による影響で副反応ばかりに気をとられている保護者が多いと考えるが、実際に話を聴き終えた後の感想としては、ワクチンの必要性をもう一度考えているみたいという意見が多く出された。中学生の女子の中には自分はワクチン接種をしたが、してよかったという意見もあった。

現在、積極的勧奨を控えているHPVワクチンであるが、今後勧奨再開となった場合には、今以上に啓発を行ない適切な理解が得られるようにする必要があると痛感している。

## 4. 今後の活動

今後も今まで同様にうちわ祭りでの啓発活動は続けたいと考えている。また、活動領域を増やすために有志の助産師などを募り、研修トレーニングを受けてもらったうえで、様々なサークルや学校などでの会合で啓発のためのお話をしてもらえるような体制づくりを目指しているところである。

# 志田 淳子
# 高校の保健体育授業向け「子宮頸がん予防教育プログラム」を開発

【プロフィール】

■所属：山形県立保健医療大学/宮城大学大学院。

■看護師として病院勤務時代に20歳から30歳代の子宮頸がん患者さんと関わる機会が多く、子宮頸がんで苦しむ方が1人でも減ってほしいという思いを強く持つ。病院から地域へ看護の提供の場を移したことがきっかけで、一般住民の健康増進に関わる機会が得られ、この時、生命（健康）と生活を守るという看護の視点と、教育の観点から子宮頸がん予防に貢献できないかと考えるようになる。

■現在は個人による活動であるが、今後「子宮頸がんゼロねっと　やまがた」を立ち上げる予定。

学校において系統的・体系的に子宮頸がん予防教育を実施することができれば、将来の子宮頸がん予防に繋がるのではないか。そう考え、山形県内のすべての高校の保健体育教諭への調査と、女子高校生を対象にした調査などを踏まえ、高校の保健体育の授業で展開できる子宮頸がん予防教育プログラムの開発に取り組む。

教育プログラムは「『子宮頸がんを予防するために行動していこう』という意識を高めることができる」ことを目標としており、講義形式の授業とワークショップにより展開する。プログラム前、後、3か月後の縦断比較では、授業後に子宮頸がん予防に関する知識と態度の得点が統計学上有意に上昇し、3か月後も維持。プログラムの有効性が確認された。

現在は個人による活動であるが、今後、人的ネットワークと情報ネットワークを融合させた「子宮頸がんゼロねっと　やまがた」を立ち上げる予定。関係機関が連携して教育プログラムを展開する他、活動の成果を全国に発信したり、教諭向けの研修会等も積極的に開催したいと考えている。また、高校生世代への教育のみならず、他の年代への啓発にも取り組む予定である。

## 1. 平成22年度の活動～高校教諭調査～

山形県内のすべての高校に勤務する保健体育を担当する教諭（以下、教諭）206名を対象に、高校の保健の授業における子宮頸がん予防教育の実態、子宮頸がん予防教育について感じること、教育プログラムの活用への意識を明らかにするために、自記式質問紙調査を実施した。その他、教育プログラムの開発に向けて、教育委員会、教諭をはじめとした関係職種との意見交換などを行った。

調査の結果（回収率46.6%）、高校の保健科目では、子宮頸がんに関する授業の実施率が約3割にとどまっていた。また、教諭は「子宮頸がんに関する知識不足」や「子宮頸がんが授業すべき重要な項目であるという認識が低い」という潜在的課題を抱えている実態が明らかになった。

一方で、教育プログラムが開発された場合の活用への意識は約9割と高く、子宮頸がん予防教育に対する関心の高さが示された。

## 2. 平成23年度の活動～女子高校生調査～

地元の芸術大学との連携により、教育プログラムにおけるロゴマークを作成した（図1）。

さらに、高校生の子宮頸がん予防行動における行動意図と関連要因を明らかにし、教育プログラム開発のための基礎資料を得るために、山形県内の高校16校に在籍する1、2年生の女子生徒2,158名を対象にした自記式質問紙調査を実施した。高校生の場合、子宮頸がん検診の受診は数年後となることから、実際の行動を予測するうえで重要な因子である「行動意図」に着目することとした。

図1：教育プログラムにおけるロゴマーク。
地元の芸術大学との連携により作成。

女子高校生を対象にした質問紙調査の結果（回収率96.0%）、現在の保健の授業では、子宮頸がん予防に必要な知識を十分獲得できないこと、子宮頸がんを予防するために重要な検診受診などへの意識が低い実態が明らかになった。また、分析より、知識の獲得のみでは子宮頸がん予防への意識が十分高まらない可能性があることが示唆された。

## 3. 平成24年度の活動～プログラム開発～

質問紙調査や高校の教諭との意見交換結果、高等学校学習指導要領保健体育編、小学校から高校の保健の学習内容を踏まえ、教育プログラムを開発した。

教育プログラムの目標は「高校生が子宮頸がん予防に関する知識を獲得し、教育プログラムに主体的に参加することにより、『子宮頸がんを予防するために行動していこう』という意識を高めることができる」とした。

教育プログラムは、講義形式の授業とワークショップにより展開する。ワークショップを併用した理由は、女子高校生を対象にした調査において、知識の獲得のみでは将来の子宮頸がん予防行動に十分結びつかない可能性があり、子宮頸がん予防に対する肯定的な態度を獲得するには、仲間と共に学ぶ学習方法の採用が重要であると考えられたためである。

教育プログラムでは、教師用の副読本（授業展開ガイドブック、ハンドブック知識版）、高校生用の教材（スライド式：基本的知識、授業の進め方、ワークシート集）を作成した。作成にあたっては、ロゴマークの作成に協力をいただいた地元の芸術大学のほか、教諭、看護師、産婦人科医師の協力を得た。

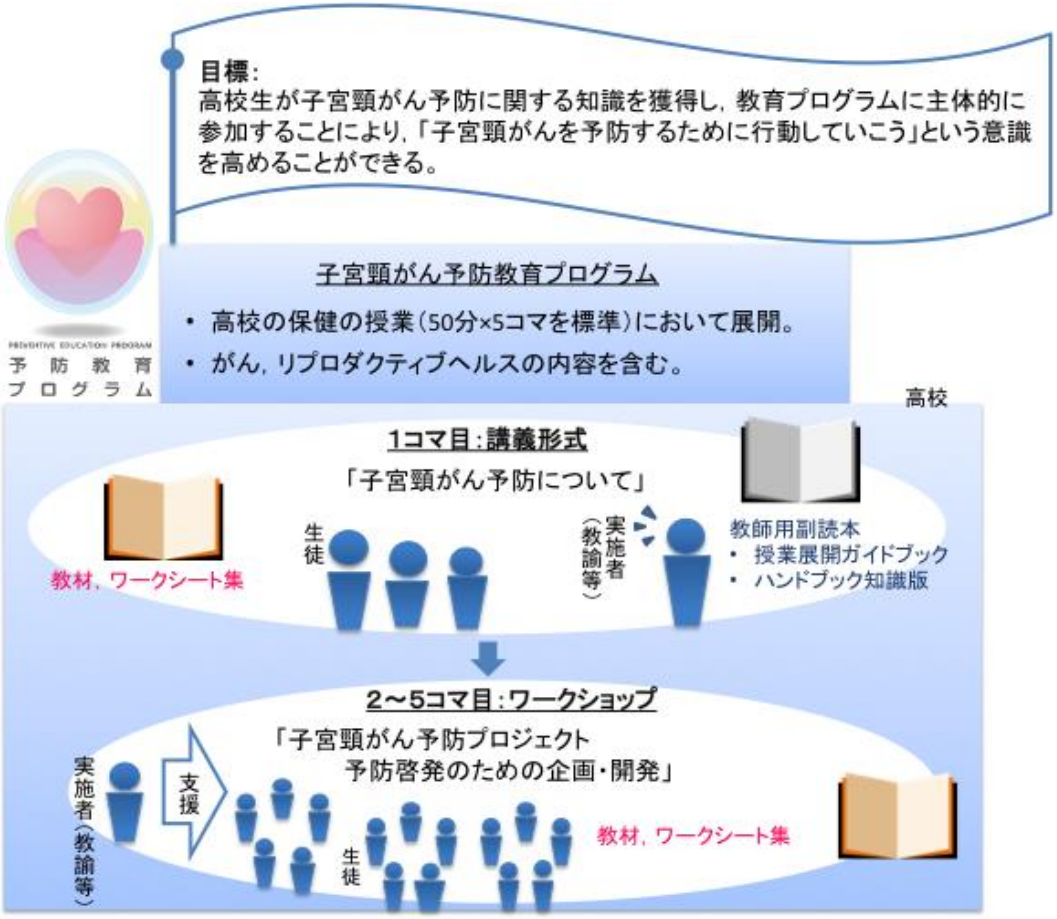
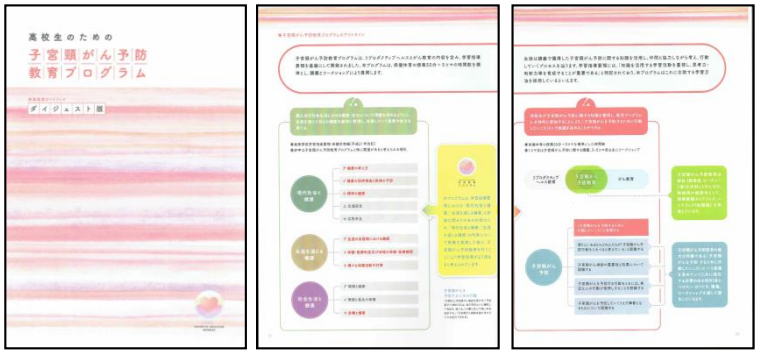



図2：開発した教育プログラムの概要

## 教師用の副読本

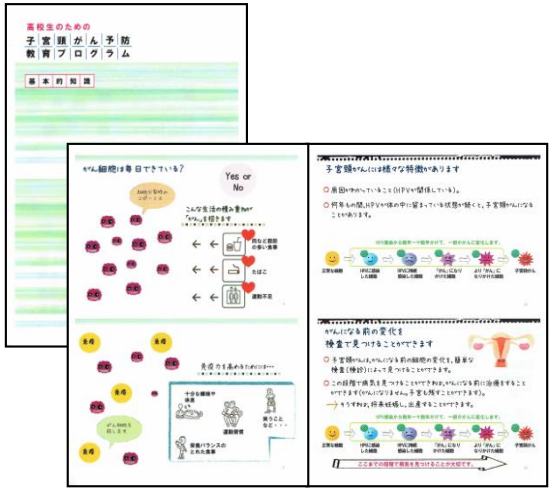
### ■ハンドブック知識版

### ■授業展開ガイドブック




## 高校生用の教材

### ■基本的知識




### ■ワークシート集

### ■授業の進め方

## 4. 平成25年度の活動～プログラム実施～

教育プログラムを山形県内の高校（男女共学、1年生全5クラス）の保健の授業において展開した。教育プログラムの展開にあたっては、高校の教諭と授業の実施時期や授業の望ましいあり方について、協議を重ねた。授業後は教育プログラムの有効性について検証を行った。

教育プログラムは、平成26年1月から2月に実施した。女子生徒、男子生徒共に意欲的に授業に取り組み、授業で得た知識を活用しながら、ポスター、新聞、ショートムービーを作成し、子宮頸がん予防の啓発を行った。劇や漫才による啓発を行ったグループもみられた。プログラム前、プログラム後、3か月後の縦断比較では、授業後に子宮頸がん予防に関する知識と態度の得点が統計学上有意に上昇し、3か月後も維持できていた。

また、3か月後時点での効果を検討するために、通常の2年間の保健の学習を終えた同高校の2年生（プログラム未実施群）と比較したところ、1年生（実施群）の知識と態度の得点が統計学上有意に高く、教育プログラムの有効性を確認した。

## 5. 今後の活動

現在は個人による活動であるが、多くの方々の支援を受けて活動を展開してきた。これまでの支援いただいた方々を中心に、まずは活動の拠点としている山形で、人的ネットワークと情報ネットワークを融合させた「子宮頸がんゼロねっとやまがた」を立ち上げる予定である（図3）。

図3のように、今後は関係機関が連携して教育プログラムを展開する他、活動の成果を全国に発信したり、教諭向けの研修会等も積極的に開催したいと考えている。また、高校生世代への教育のみならず、他の年代への啓発にも取り組む予定である。

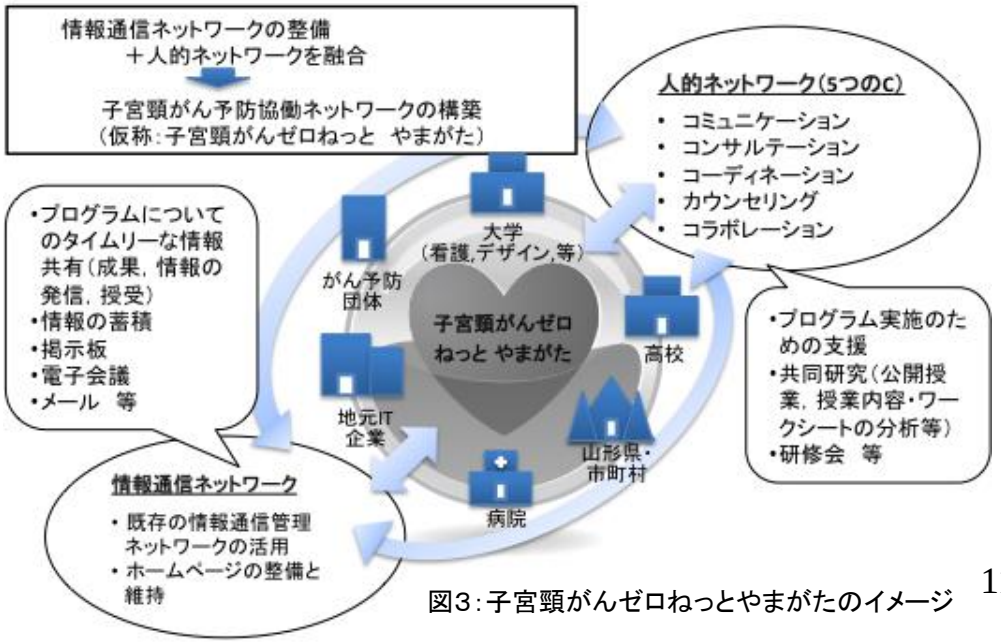


図3：子宮頸がんゼロねっとやまがたのイメージ

# 八田 賢明
# 新成人をターゲットに子宮頸がん検診促進のチラシを作成

【プロフィール】

■産婦人科医として約50年のキャリアを持つ。松戸市にジュノ・ヴェスタクリニック八田を開業し40年になるベテラン産婦人科医。

■古くから子宮頸がんの若年化を懸念し警鐘を鳴らす。

松戸市にジュノ・ヴェスタクリニック八田を開業し40年になる産婦人科医の八田 賢明医師は、古くから子宮頸がんの若年化を懸念し警鐘を鳴らす。

認定NPO法人子宮頸がんを考える市民の会と協力し、新成人をターゲットに子宮頸がん検診促進のチラシを作成。地域に根付いた子宮頸がん予防・啓発活動を展開する。

チラシは、2012年より、松戸市成人式で配布。2013年は、女性だけでなく男性にも読んでもらえるものにバージョンアップ。成人の祝福のメッセージとともに、女性には「いつの日かママになりたいみなさんに、知ってもらいたいコトがあります」「20歳からの小さな決心」、男性には「あなたの大事な人を守るために、知ってもらいたいコトがあります」「スーパーモテ男君の常識」と、マンガ仕立てで子宮頸がん検診受診を呼びかける。

2014年は、松戸市成人式での配布のほか、全国で10,000部販売。

今後、国自治体への販売や、松戸市成人式へのブース出展など、さらに多面的な活動を計画している。

## 1. 新成人をターゲットに子宮頸がん検診促進のチラシを作成

古くから子宮頸がんの若年化を懸念し警鐘を鳴らす。

子宮頸がん検診は20才より開始するため、新成人をターゲットに子宮頸がん検診促進のチラシを作成

2012年　松戸市成人式で配布をする、20才の貴女へ送る子宮頸がん検診受診促進のチラシを作成。
（制作・配布協力：認定NPO法人子宮頸がんを考える市民の会）

2013年　男の子にも読んでもらえるものにバージョンアップ。松戸市成人式で配布をする。
（制作・配布協力：認定NPO法人子宮頸がんを考える市民の会）

認定NPO法人子宮頸がんを考える市民の会で販売開始。

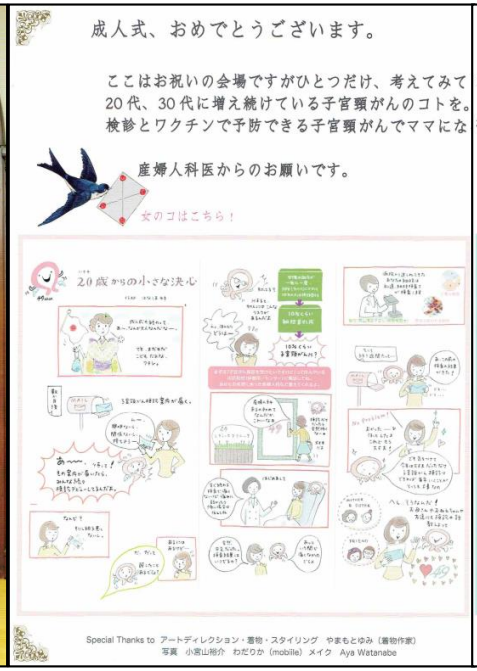
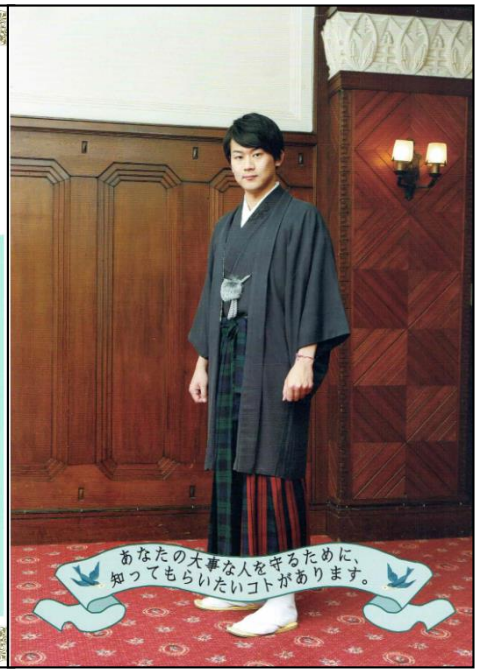
2014年　松戸市成人式で配布をする。（制作・配布協力：認定NPO法人子宮頸がんを考える市民の会）

2014年　全国で10,000部販売。

2015年　松戸市成人式で配布をする。（制作・配布協力：認定NPO法人子宮頸がんを考える市民の会）

地域に根付いた子宮頸がん予防・啓発活動を後押しする。

## 2. 今後の活動

国自治体への販売（窓口：認定NPO法人子宮頸がんを考える市民の会）
松戸市成人式へのブース出展（協力：認定NPO法人子宮頸がんを考える市民の会）

## 新成人をターゲットにした、子宮頸がん検診促進のチラシ